

## 自然の秩序を用いた動きのある芸能空間の創造

日大生産工(院) ○細川 日和 日大生産工 篠崎 健一

### 1. はじめに

上野の不忍池の辯天堂に祀られるご本尊さま、辯才天は芸能の神様である。上野には留まって芸能を見る場がたくさんあるが、それらを創造する活動的な場がない。そこで、芸能の出発点である基地であり、工房のような芸能空間を設計する。この研究は、上野の山にある確立された芸能空間と対照に、不忍池のほとりの谷の場に動きのある芸能空間を創り出すことを目的としている。

#### 1.1. 辨天堂

不忍池に祀られる辯才天は、古代インドの川の女神であるサラスヴァティが仏教に取り入れられた存在で、水の神さまとして信仰されてきた。川のせせらぎの奏でる音が「妙音」とされることから、音楽・芸術・技芸・文芸など、才能を司る女神として広く崇められている。仏教とともに日本に伝來した後も、水との深い結びつきは変わらず、湖・池・島・海辺など水辺の地に多く祀られてきた<sup>1)</sup>。

#### 1.2. 上野公園の芸能空間

上野公園には、東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、東京文化会館、東京都美術館、東京芸術大学などの芸能空間が存在している(Fig. 1)。

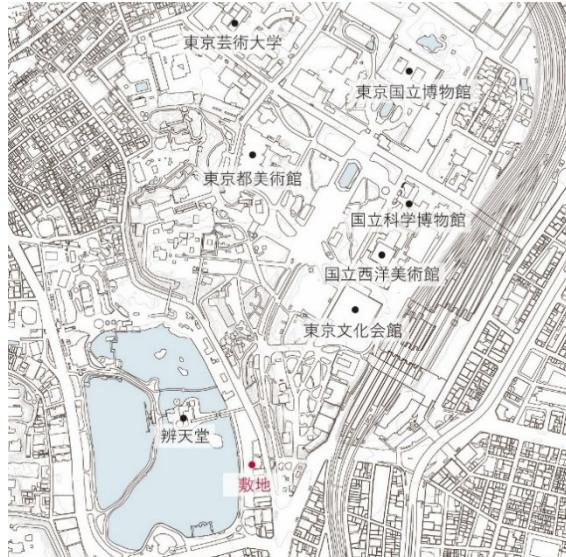


Fig. 1 上野公園周辺地図

### 2. 計画敷地「台東区上野不忍池周辺」

上野の山の入り口であり、蓮の名所として知られた不忍池のほとりを敷地とする。東側は、上野の山の入り口となっており、高さ7mの高低差があり、木で生い茂っている。西側は、不忍池が広がっており、辯天堂が建っている。敷地面積は、8500m<sup>2</sup>である。用途地域は、商業地域であり、高さ制限はない。容積率は600%，建蔽率は80%である(Fig. 2)。



Fig. 2 計画敷地

### 3. 空間プログラム

披露する場として、プロの人の演奏が可能なしっかりとした劇場と地域の催し物や音楽発表会、あるいは展示室にもなる可変式の小劇場を内包する。そして、制作活動の場として、練習室、創作スタジオ、奏でるスタジオ、踊るスタジオ、集まるスタジオ、レコーディングスタジオなどを内包する。アート・演劇・音楽の芸能を生み出す場所として、活動ができる空間プログラムを用意する。一般の人から、プロの人まで、気軽に訪れる場所を目指す。

### 4. 劇場の変遷

歴史的にみると、劇場・ホールは、その目的・場所・時代の建築技術などに応じて非常に多様な形態を持っている。現在我が国にある劇場・ホールを大別すると、古代ギリシャ劇場を起源とするオープンステージ、オペラを契機に誕生したプロセニアムステージ、その両者の可変を考慮したアダプタブルステージを持つ劇場や多目的ホールなどの演劇的性格の強い空間、会所・農村舞台・社寺拝殿で行われていた能やその流れをくむ歌舞伎などの我が国の伝統芸能空間、宫廷サロンや協会にその端を発するクラシック音楽のための空間が挙げられる<sup>2)</sup>。以下に、劇場としての使われ方が確立しているものを抜粋する。さらに、劇場・ホールという用途のみにとどまらず、活動的な動きがみられる事例を対象に調査する。

#### 4.1. 東京文化会館

前川國男建築設計事務所によって 1961 年に設計され、2317 座の大ホールと 649 座の小ホールがある。オペラ、バレエ、クラシックコンサートを中心に国内外の第一級の公演を行ってきた拠点的な施設である。舞台の基本的寸法関係の良さ、楽屋数の多さ、大規模な

がら巧みに構成された客席、伸びやかなホワイエなどバランスのとれた全体計画や建築空間としての魅力が挙げられる<sup>2)</sup>(Fig. 3)。

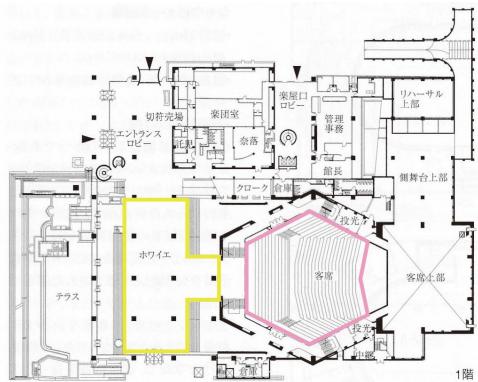


Fig. 3 東京文化会館

#### 4.2. サントリーホール

安井建築設計事務所によって1986年に設計され、2006席の大ホールと380席から432席と異なる使いができる小ホールをもつ。世界一美しい響きのコンサートホールをつくることから「音楽は演奏家と聴衆が一体となって創り、共に喜び楽しむもの」という、指揮者・故ヘルベルト・フォン・カラヤンの助言により我が国初のワインヤード型を採用した<sup>3)</sup>(Fig. 4)

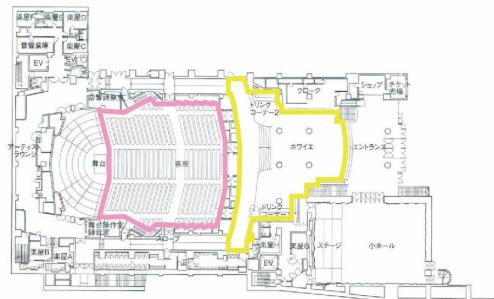


Fig. 4 サントリーホール

#### 4.3. 新国立劇場

柳澤孝彦とTAK建築・都市計画研究所によって1997年に設計され、1810席の大ホールと1038席の中ホールがある。新国立劇場は、オペラ・バレエ・演劇および新しいタイプの舞台芸術などの上演を主軸に、現代舞台芸術の多彩な公園事業をはじめ、実演家および舞台技術者の研修、舞台芸術に関する内外の資料の情報収集、保存・公開、そして諸外国との交流や地域文化復興などの諸事業を行うことを目的とした、日本にはじめて実現した国立劇場である<sup>4)</sup>(Fig. 5)。

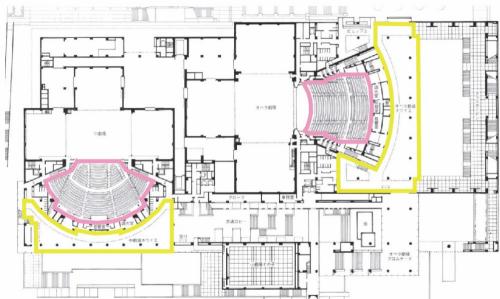


Fig. 5 新国立劇場

#### 4.4. 東京芸術劇場

芦原建築設計研究所によって1991年に設計され、2017席の大ホールと850席の中ホール、450席と300席の小ホールが二つと計4つのホールをもつ。東京芸術劇場は、内外一流のアーティストによる優れた舞台芸術の鑑賞の場とし、また、みずからの創造活動の拠点として、人間性豊かなぬくもりのある社会を実現させることを目的としている<sup>5)</sup>(Fig. 6)。

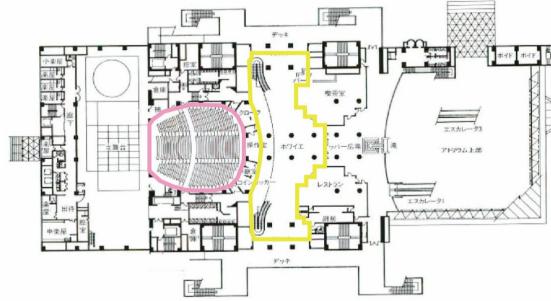


Fig. 6 東京芸術劇場

#### 4.6. ベルリンフィルハーモニー

によって設計1963年に設計された2440席の大ホール、によって1987年に設計された1180席の小ホールをもつ。このホールの独創性は、ランドスケープ的な空間構成にある。音楽を中心にしてコンセプトから出発して、ワインヤード型という新たな舞台・客席形式をつくりだした。また、客席下部のホワイエにあって様々な方向に配置された階段は、人の動きを計算して見る・見られる関係を巧みにつくり出したアクティビティ溢れる空間である<sup>2)</sup>(Fig. 7)。

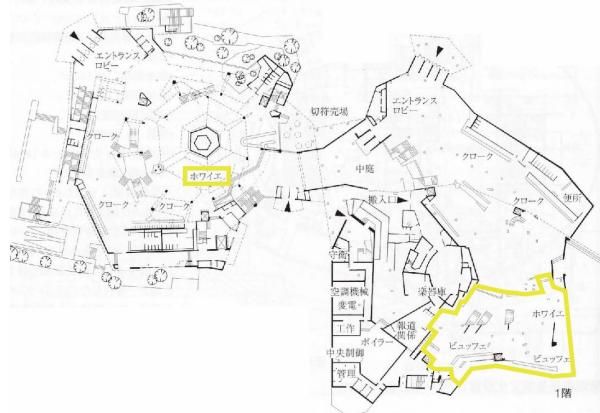


Fig. 7 ベルリンフィルハーモニー

#### 4.5. スタッドシアター・アルメラ

オランダのアルメラにあり、SANAAによって2006年に設計された。1050席の大ホールと350席の中ホールのふたつの市立劇場、150人用の小ホールを含む音楽・絵画・彫刻・演劇・ダンス・コンピュータ等の教室群からなる、子供から大人までを対象としたカルチャーセンターとの複合施設である。大ホールから小さな音楽教室といった大小さまざまな大きさの部屋が、その大きさに関わらず等しくパブリックに開かれていること、劇場とカルチャーセンターとを交互に関連させて使うことが想定されたことから、すべてのパブリック・プログラムをワンフロアに配置している<sup>6)</sup>(Fig. 8)。



Fig. 8 スタッドシアター・アルメラ

#### 4.6. 長岡リリックホール

伊東豊雄建築設計事務所によって1996年に設計された、長岡リリックホールは、700席のコンサートホール、450席のシアター、大中小10室のスタジオなどからなるコンプレックスである。長岡市がすでに1500席の多目的ホールを有していたため、この建物は、二つのホールを音楽と演劇を主とした中規模の専用ホールとし、市民が日常的に利用できる練習施設を充実させることにより、単なる鑑賞のみの場ではない、市民の芸術文化活動の拠点として計画されている<sup>7)</sup>(Fig. 9)。



Fig. 9 長岡リリックホール

#### 4.7. 座・高円寺

伊東豊雄建築設計事務所によって2009年に設計された。300席のさまざまな舞台形式に対応できる専門性の高い小劇場と300席の区民ホール、阿波おどりホールなどから構成されている<sup>8)</sup>。地上に現れる部分を鉄板とコンクリートからなる幕によって覆い、周辺の都市的状況に対してあえて閉じ、芝居小屋としての象徴性をだそうとしている<sup>9)</sup>(Fig. 10)。



Fig. 10 座・高円寺

#### 4.7. フィルハーモニー・ド・パリ

フランスのパリにあり、ジャンヌーヴェルによって2015年に設計された音楽のために創られた大規模複合施設である。2400席のホールをもつ、フィルハーモニー・ド・パリは音楽界をリードし、すべての人に開かれたアート表現の場を提供している。クラシック音楽や、ダンス、ジャズ、ポップミュージックまで、幅広い音楽の世界を発見できるようにつくられている。フィルハーモニー・ド・パリは異文化や異なるアートジャンル間の架け橋となり、切磋琢磨する文化の交流点となっている<sup>10)</sup>(Fig. 11)。



Fig. 11 フィルハーモニー・ド・パリ

### 5. 建築のつくり方

#### 5.1. 空間の動き

けんちく世界をめぐる10の冒険という本の中で、私たちの街に建つ建物は、ほとんどが水平な床と決まつたピッチで並べられた柱、そこにはまるガラス窓と間仕切り壁といった構成であり、どこに行っても同じ味気ない空間が繰り返されていると述べられている。自然のおもしろさを盛り込んだような自由な建物ができるないかという問い合わせから、エマージンググリッドシステム(Fig. 12)と名付けられた、自然の楽しさをもつ、より自由で身体に訴えかける空間を生み出した<sup>11)</sup>。このシステムのように人が触れ合ったり、動いたりすることによって、動きのある空間を創り出す。

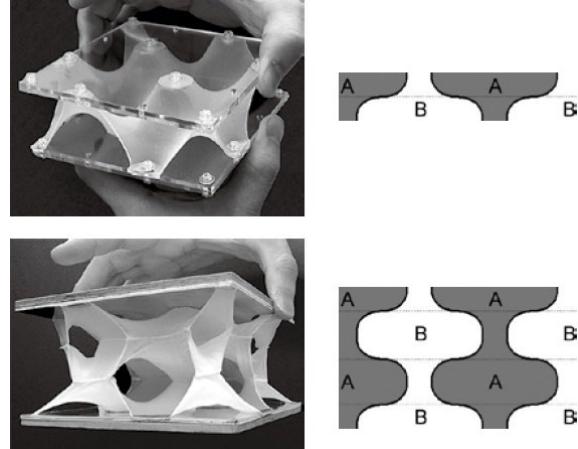


Fig. 12 エマージンググリッドシステム

#### 5.2. 台中国家歌劇院

伊東豊雄建築設計事務所によって2016年に設計された、2000席のグランドシアター、800席のプレイハウス、200席のブラックボックスの3つの劇場を有する複合施設である。それぞれの空間が身体感覚に訴えかけながら生き生きと有機的につながり、劇場のコンプレックスというだけでなく、多様なアクティビティを融合させることによって、施設全体が舞台芸術・文化創造の場となることを目指している<sup>12)</sup>(Fig. 13)。



Fig. 13 台中国家歌劇院

## 6. 建築デザインコンセプト

### 6.1. 芸能の基地・工房

芸能とは動くことである。描いたり、つくったり、奏でたり、演じたりと動くことから芸能がはじまる。上野には芸能を披露する場が多くあるが、劇場や美術館など、そこに留まることで楽しむ芸能空間が多い。しかしそれらを創造する場がない。そこで、芸能の出発点である基地であり、工房のような芸能空間を設計する。この建築は、音楽もアートも演劇も、すべて同じである。それぞれの視点から刺激を得て新たなものを創り出す手助けをする。

### 6.2. 境界がない全員が主役の芸能空間

一般の人、プロの人、プロを目指す人など幅広く使うことができる劇場を設計する。実験劇場や、練習場、創作スタジオなどを内包し、それが自由に行き来し、多様な使い方のできる空間を設計する。さらに、披露する人も観客も全員が主役となるような劇場を目指し、表裏のない動線を工夫する。

### 6.3. 一日を共にする芸能空間

劇場はその日の公演のために訪れて、公演が終わったら劇場を後にする。ワークショップや参加型プログラム、創作スタジオなどを通して、1日中過ごせる場所を提案する。

## 7. 具体的計画

### 7.1. 蓮の葉の秩序を利用する

蓮の葉の水が弾かれたりつながったりする様子を空間で表現する。場と場のつながりが、たまりをつくって新たな空間をうみだし、水の泡がつながるように空間がどんどん増えていくことで動きのある空間ができる(Fig. 14)。



Fig. 14 蓮の葉の波紋案

### 7.2. 用途同士を絡ませる

いろいろな場がレベルを超えて絡まっていくことで、動きが生まれる。大きさの異なるボックスをずらして重ねることで、場に強弱をうみ、用途同士の関係を曖昧にする(Fig. 15)。



Fig. 15 用途の絡まり案

### 7.3. ボリュームの周りを絡ませる

演劇・音楽・アートの3つの棟を配置し、その周りを絡ませるように空間をつくる。内外の連続した空間が活動を豊かにする(Fig. 16)。



Fig. 16 壁の周りでつながる案

### 7.4. 劇場を浮かせて抜けをつくる

ボリュームのある劇場を浮かせることで、不忍池から山へ、山から不忍池への眺めを遮らないように抜けをつくる。それぞれの用途が内外を行き来しながら絡まっていく(Fig. 17)。



Fig. 17 抜けをつくる案

## 8. 今後の展望

芸能空間のプログラムとデザインコンセプトをより明快にし、上野の山の芸能空間との対比を明らかにする。また、設計するにあたって、周辺環境を考慮し、山と池の関係性や、景観を失わないように意識する。

## 参考文献

- 1) 鈴木健一, 不忍池ものがたり－江戸から東京へ, 岩波書店, (2018) pp. 19–22.
- 2) 日本建築学会, 建築設計資料集成－展示・芸能, 丸善株式会社, (2003)
- 3) 新建築編集部, サントリーホール, 新建築, 61巻, 11月号, (1986), p. 231.
- 4) 新建築編集部, 新国立劇場, 新建築, 72巻, 6月号, (1997), p. 104.
- 5) 新建築編集部, 東京芸術劇場, 新建築, 66巻, 1月号, (1991), p. 259.
- 6) 新建築編集部, スタッドシアター・アルメラ, 新建築, 83巻, 1月号, (2008), p. 88.
- 7) 新建築編集部, 長岡リリックホール, 新建築, 72巻, 1月号, (1997), p. 128.
- 8) 新建築編集部, 座・高円寺, 新建築, 84巻, 5月号, (2009), p. 50.
- 9) A. D. A. EDITA TOKYO, PLOT05伊東豊雄:建築のプロセス, GA, (2014), pp. 98–184.
- 10) Philharmonie de Paris: Homepage  
<https://philharmoniedeparis.fr/fr>
- 11) 伊東豊雄建築塾, けんちく世界をめぐる10の冒險, 彰国社, (2006), pp. 7–29.
- 12) 新建築編集部, 台中国家歌劇院, 新建築, 92巻, 3月号, (2017), p. 54.